

240) 雲になりたい

哀しみを涙にためて ただひとり海を見てると

一粒の涙はやがて 重くなり砂にこぼれた

いつの日か置き去りにした 哀しみを拾い集めて

ひざごぞを抱えるように 生きている私がいたの

あの日から2年が過ぎて 今日もまた海を見ている

髪の毛が背中に伸びて 潮風がうなじを撫でる

今はもう彼と二人で 哀しみの季節は過ぎた

運命の時を泳いで この岸にたどり着いたの

砂浜はどこまで続く 果てしなくドライブウェイ

風音に私の好きな ユーミンの歌は途切れて

速すぎる^{とき}歳月の流れが この愛をのみこんでゆく

口づけを投げかけるよに 過ぎて行く季節がこわい

人はみな漂う波に 揺れながら生きている

平凡に生きてくことを 空しいと感じてたのは

若すぎた私のせいね 潮騒に心は^{なご}和む

今はただ空に抱かれて 夢を見る雲になりたい